（２）新幼稚園教育要領の具現化への取組事例

各訪問調査協力園では、保育の質向上を目指すとともに、新要領の理解と実施に向けて各園の実情を勘案しながら様々な工夫をし、取り組んでいる。その中で、特に参考となる取組やその方法等について、概要を紹介する。

事例は、各園が実施している取組の方法をいくつか紹介するものと、特定の取組について、具体的な内容を紹介するものがある。いずれの事例も、それぞれの園が抱えている課題に対応するための工夫であり、当該園の実情に即して検討し実施されている取組である。それぞれの課題と実情は多様であり、課題解決策も多様になるものであることから、一律に在り方を示すことはできない。ここで紹介する事例を自園の実情に応じた取組の内容・方法を考えヒントとして参考にし、実践に結び付けられることが望まれる。

取組事例一覧

	事例名	事例で伝えたいこと・概要
1	教材の工夫と環境の構成	幼児が遊びに没頭し充実感を味わうため、教材を精選していく過程で、何を考慮することが必要か。様々な保育の場面から学びの質を高める教材の工夫を示す。
2	ドキュメンテーションの作成	日々の記録を写真等で可視化するドキュメンテーションによって、幼児の評価の参考となる情報を蓄積し、幼稚園等と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進めていく。
3	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた保育の振り返り	担任が記載する日々の保育記録について、園長が感じたことや「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と関連する事項についてコメントを付ける往還的な関わりによって、理解を深め指導力の向上につなげる。
4	多様性を尊重する教師の援助と学級経営	障害のある幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児など、特別な支援を必要とする幼児を受け入れ、多様性を尊重する学級経営を考える。
5	園内研修の工夫	保育時間の長時間化、勤務体系の違いなど、全員の共通理解を図っていくことが困難な状況の中、園の課題を的確に捉えて解決策を共有するなど、実情に応じて様々な園内研修の方法を工夫する。
6	カリキュラム・マネジメントの意識化	保育を振り返る中で、保育内容や人的・物的環境を工夫していることが、カリキュラム・マネジメントにつながっていることを意識化し、組織的・計画的に推進する。
7	社会に開かれた教育課程	園の教育活動の全体像を、保護者や地域に分かりやすく発信する教育計画の見える化を目指す。

取組事例１　教材の工夫と環境の構成

幼児の周りにある様々な物が教材になる可能性があり、教師は幼児理解に基づいて幼児の遊びを見通し、物の特質や特性を見極める目をもって教材を精選し、幼児の活動の広がりや深まりに応じて環境を構成することが求められる。そこで、訪問調査協力園における様々な教材の工夫や、幼児の活動の広がりに応じた環境の構成の事例を紹介する。

１　教材の工夫について

幼児の主体的な活動と教師の役割について、幼稚園教育要領解説 P45 に、「幼児と共によりよい教育環境をつくり出していくことも求められている。そのための教師の役割は、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成する役割と、その環境の下で幼児と適切な関わりをする役割とがある。」と示されている。また、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成するということは、様々な遊具や用具、素材などを多く用意すれば遊びが豊かになるのではなく、「幼児の関わり方を予想して物の質や量をどう選択し、空間をどう設定するかを考えていくことが重要」で、「ときには幼児自身が興味をもって関わることで教師の予想をこえて教材としての意味が見いだされていくこともあることに留意が必要である。」「教材を精選していく過程では、幼児理解に基づき、幼児の興味や関心がどこにあるのか、幼児同士の関わり合いの状況はどうなのか、教師の願いや指導のねらいは何かなどを考慮することが必要である。」とされている。

２　幼児のイメージを豊かに表現する教材の提示

保育事例２「それぞれがやりたい遊びを楽しむ」（Ｐ 40）で紹介した３歳児の遊びで、幼児が遊んでいる恐竜のペープサートは、ちぎった風合いのある色画用紙片を組み合わせた物に黒の点シールで目を付け、紙を丸めた棒につけたものである。

写真①

３歳児は紙を破ることはできるが、紙の裂ける方向を自由に操作したり、大きさを調整したりすることは難しい。そこで、教師は事前に色画用紙を適当な大きさにちぎり、紙片の大きさ、形、色合いを配慮して用意することで、３歳児は気に入った紙片を組み合わせて、自分なりに大きさや色の組み合わせを楽しみ、動かしやすい大きさのものを作ることができた。実際、幼児にとって、自分で作ったものは愛着を感じ、自由に動かして遊ぶことで、自分なりのイメージを教師や友達と伝え合う楽しさを味わう姿が見られた。

３　教材の特性や幼児の関わりの状況に応じた環境の構成や場づくりの工夫

５歳児は様々な遊びに取り組み、一つのことを習得し自信をもつと、更に少し難しい遊び方を考え、挑戦しようとする姿が見られる。そのような５歳児の欲求を受け止め、目的をもって取り組み、満足感を味わい、自信につながる教材として一輪車や一本歯のぽっくりを選び、その教材との関わりを予測した教師の環境の構成の工夫があった。

例えば、保育事例 12「一輪車でオルゴールしたいね」（P 50）では一輪車を使って、友達とつながって回るという難しい乗り方に挑戦している。スタートの場でふらふらしていては、3 人で回り出せないが、教師が置いたゲームボックスに幼児が寄りかかることができることによって、3 人の体が安定し、回り始めることができた。教師が一輪車という教材の特性や幼児同士の関わり方の状況をよく捉えているからこそ、カラーボックスを置くという援助が有効であった。さらに、メリーゴーランドのように回りたいという思いが生まれ、ゲームボックスの上にカラーフープを置くことで、幼児たちは相手の動きを気遣いながら試行錯誤し、最後には実現して満足感を味わえたのである。

写真②

一本歯のぽっくり（写真②）を履いて立つのは難しいが、立てれば、歩くコツをつかむことができるので、教師は近くに長椅子を置いている。この長椅子を置くことで、一人一人が挑戦しやすくなり、自分のペースで何度も挑戦できる。そして、歩けるようになると後ろ向きに歩く、ジャンプをするなど、自分なりに難易度を上げて遊び方を工夫する姿、何度も諦めずに挑戦する姿が生まれている。

4 「遊誘財」という考え方

A 幼稚園は教材研究を通して、幼児と教材との関わりについて理解を深め、遊びが充実していくような豊かな教育環境として「遊誘財」という考え方を実践している。「遊誘財」とは、幼児が興味・関心をもって引きつけられ、様々に感じ、気付き、夢中になって遊び込み、そのものの本質や面白さに迫り、その中から豊かな感情や多様な学びを得られるものと考え、幼児を遊びに誘う「ものや環境」を「遊誘財」と命名し、幼児の願いや気付きに寄り添い、学びを深めるための実践が工夫されている。

写真③

例えば、毎朝行っている砂場の掘り起こしでは、前日の幼児の遊びから今日の遊びを見通し、写真③のように、幼児の遊びのイメージを触発するような紋様が描かれている。この紋様からどのようなイメージを想起するかは幼児に任されているが、いつもの砂場にこのような紋様があることで、遊びのイメージを誘う意図が込められている。

写真④

ヒヤシンスの水栽培をすると、根が長く伸びてとぐろを巻いたようになる。それを見た幼児は「根っこがくるくる回ってる。」「水を変えたら、根っこが（容器に）入らなくなっちゃった」と声を上げる。その驚きや困惑の声を受け止めた教師は「植物の根」が伸びていく様子を、興味をもって見られるようにしたいと考え、観察用の容器（写真④）を発案している。長い根を見た幼児は、どのように探求心を強め開花まで期待を膨らませていくのか、興味深い環境であり、一つ一つの成長の違いにも関心が向き、気付きが生まれるであろう。このように、幼児の遊びの状況に応じた教材の工夫や開発が望まれる。

取組事例２　ドキュメンテーションの作成

保育の質向上は、日々の保育の振り返りと幼児の育ちの確認を教師間で行うとともに、保護者と共有する評価を行うことによって保たれる。その際、日々の記録を写真や動画などに残し可視化したいわゆるドキュメンテーションやポートフォリオという形で、幼児の評価の参考となる情報を日頃から蓄積することは、幼稚園等と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進めていく上で効果的である。

訪問調査では、園長・教員ともに「写真や動画を利用した記録」について「とてもよく行っている」と回答する園が複数あり「写真や動画を利用した記録」の可能性を感じている様子が見られた。特に積極的に画像を活用していた取組を紹介する。

１　指導案や記録、計画立案時に写真を利用する

Ｂ園の園長は「働き方改革や預かり保育の人数の増加もあり話し合う時間の確保が難しくなっている」と、園が抱えている課題を認識していた。しかし、よりよい教育実践を実現するためには話し合いが欠かせないと考え、「写真を利用した記録」の作成と活用に取り組んだ。写真を利用することで得られる効果として以下のことがあげられた。

・同じ場面を見ていなくても状況を理解しやすい。
・具体的な幼児の姿を見ながら語り合うことで実践的な話し合いができる。
・経験の浅い教師も幼児の姿を画像で記録することで、話し合いに参加できる。
・短時間で密度の高い保育の振り返りができ、具体性のある計画立案につながる。
・写真を見ながら語り合うことで、幼児理解や教材理解が進む。
・初めのうちは記録としてあまり意味が感じられない写真が多かったが、経験を重ねる中で、遊びの見方が育ち、記録も充実してくる。

２　保護者に幼児の取組の意味を知らせるために写真を利用する

Ｂ園では２学期末に、幼児が工夫して表現する様子を発表する機会として発表会を行っている。発表会という行事においても、幼児の主体性の発揮を重視しているため、発表会へ向かっていく過程やそれぞれの幼児の思いを保護者が理解することが重要だと考えている。資料１は、発表会直前の保護者向け配布物の一部である。幼児が発案し友達に呼び掛けたり、演じ方や表現する内容を考え合ったりするなど、発表会当日には見えないが、呼び掛けに答えて他学年の幼児が関わっている姿が写真と簡単な記述から伝わってくる。この資料を活用して発表会前に１時間程度の保護者会を行っている。資料を配布するだけにとどまらず、その資料を活用して保護者との対話の機会をつくることにより、理解が深まることが期待で、効果的な方法だと思われる。

資料１　発表会直前の保護者配布物

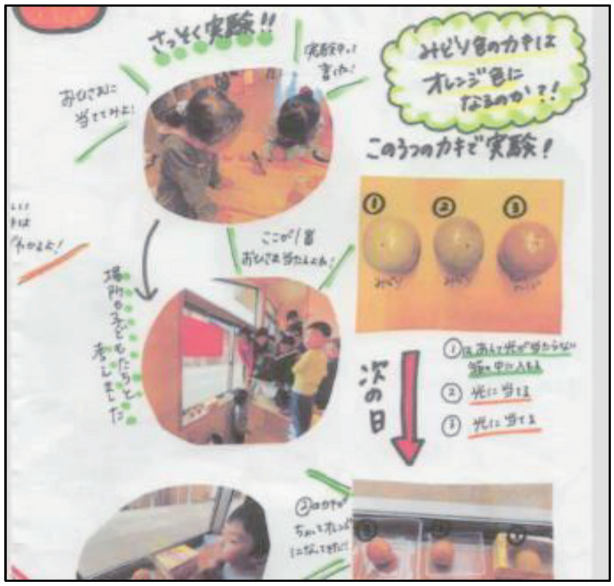
3　保護者に幼児の疑問や発見を伝えるために写真を利用する

幼児は身近な環境に関わり様々に感じ考える。幼児が抱いた疑問は、探究の種である。資料２は柿をめぐる探究の記録である。

「どうして緑の柿があるの？」という疑問に対して柿取りをしてくれたＹさんから「みどりの柿もお日様の光を当てるとオレンジ色になるよ」という答えが返ってきた。驚きの次に「やってみよう！」という考えが生まれ実験が始まった。

これらの記録からは、小学校以降の教育の基礎を育んでいるのが幼稚園なのだということが伝わってくる。小さなつぶやきを聞き逃さず探究、発見へと誘う教師の関わりが重要であり、記録を作成する経験を重ねることで、遊びを見る目が養われていることが分かる。

資料２　柿をめぐる探究の記録



各保育室には、幼児たちが見ることができる掲示板があった。そこにも、日々の生活の中で発見したことが掲示されており、幼児が様々に遊びを考えて展開している過程が紹介されていた。また、他の学級では、腕相撲大会が盛んに行われていたが、壁には外国で行われている「アームレスリング」の写真が張り出されていた。この写真がきっかけとなり、アームレスリング場ができたり、レフェリーが登場したりした。画像は遊びのイメージを広げたり共通にしたりする効果がある。インターネットや画像の活用を推進することで豊かな遊びを支えることができると思われる。

4　ドキュメンテーションの作成と活用に当たっての配慮点

・ドキュメンテーションでは、遊びの軌跡や取組の過程を記録するようにしたい。遊びの過程では、試行錯誤したりやり直したりしている姿があり、そこに幼児の学びがある。この試行錯誤を見守り支えているところに教師の援助がある。幼児は遊びの中でこのように学んでいるということを保護者に伝えていくことが重要である。

・写真や動画を利用した記録は、保護者との情報共有や教師間の連携に効果を発揮する。作成して終わりではなく、語り合いの材料として活用することが大切である。しかし、写真を撮ることに夢中になり援助のタイミングを逃すことがないよう注意する必要がある。

・教師間で連携をとり記録を取り合うことで、教師の関わりを記録することができる。それによって援助を見直す視点も得られる。

・教師によって記録する視点は変わる。それぞれの記録を読み合い、学び合う意味はそこにある。同じ場面を見ても捉え方は多様であり、記録を基にした話し合いの中で互いの視点に触れることで、新しい見方を得ることができる。

取組事例３　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた保育の振り返り

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以降「10の姿」と表記）を活用しながら、幼児の育ちを全体的総合的に捉えるために、担任が記載する日々の保育記録について、園長等が感じたことや「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と関連する事項についてコメントを付ける往還的な関わりによって理解を深め担任の指導力向上につなげている事例である。

１　日々の記録を担任と園長等とのコミュニケーションツールに

・担任は、保育終了後に毎日、幼児の活動の様子、指導の経過、幼児の姿を読み取り感じたことや指導上の悩みなどをA4判１～２枚の記録を書き、園長等に提出している。
・園長等は、提出された記録を読み、その時期の発達や援助、また担任の悩みに応えるようにコメントを加筆する。
・園長等は、できるだけ「10の姿」の視点から見た幼児の育ちを伝えていくように心掛け、具体的な幼児の姿について「10の姿」に向かう幼児の育ちの過程として担任が実感できるようにしている。また、「10の姿」のどの視点につながるか、付箋を付けて分かるようにし、その記録を、一人一人の記録としても活用している。

＜５歳児記録　５月15日　「一人暮らしって言ってごらん」＞

A児とB児がスカートを身に着けてなんとなく一緒に遊んでいる様子だった。そこにC児とD児も「入れて」と加わろうとした。教師のところへC児とD児が「Aちゃんが入れてって言っても、だめって言って、入れてくれないの」と言いに来た。教師は二人に「どうしてだめなのか、Aちゃんに聞いてみた？」と声を掛けると、二人はもう一度A児のところへ行き尋ねた。
C児「どうして入れてくれないの？」
A児、黙っている。もう一度C児とD児が尋ねるとB児が、「Aちゃん、一人暮らししてるんだよって言ってごらん」と言った。

A児「考え中なの」
B児「一人暮らししてるんじゃなかったの？」
B児の言葉を聞いてC児とD児は、A児の思いがなんとなく分かったようで、C児「じゃあ、友達ってことは？友達ってことにするのはいいの？」
D児「友達ってことにしよう、いい？」と自分たちで役を変えて、A児とB児の遊びに加わるための方策を考えた。
するとA児も「いいよ」と答え、B児が「じゃあ、Bちゃんちに住む？」と声を掛けた。教師が「Bちゃんのお家もあるんだ」と言うと、

すごく面白い言い回しですね。「だめ」じゃなくて“つもり”で楽しく上手に断ろうとしている。
まさに相手の立場や状況が分かった上での工夫した表現で伝えようとしていますね。

C 児と D 児は「B ちゃんちに入る、入れて」と言い、B 児は嬉しそうにうなずき、その後 4 人で遊び始めた。

（教師の読み取り）……中略

……一人一人が周りの状況を見たり、友達の様子を感じ取ったりしながら心を動かしていることをこれからもよく見ながら捉えていきたいと思う。

「道徳性・規範意識の芽生え」の中に、友達の気持ちに共感し、相手の立場に立って行動するようになるとありますが、B 児の「一人暮らしといって、・・・」という提案は断られたものの、A 児の立場や A 児に断られた C 児と D 児の立場になって考えることができた表れだったのでしょうね。A 児も B 児の発言にほっとした思いをもったことでしょう。

先生が「どうしてだめなのか、聞いてみた？」と声を掛け、その後「B ちゃんの家もあるんだね」と幼児たちが心を揺らしながらもいい方向へ向かおうとするのを支えたこと、自分たちで何とかしようと見守ったことで、その子なりに相手の気持ちを分かろうとする内面の心の動きを捉えることができたのだと思います。

――――：教師の援助　　青字：園長の幼児の姿の読み取り

赤字：「10 の姿」の視点から見た幼児の育ちと指導に関する園長の考察やアドバイス

2　この実践の良さやメリット

- 園長等は、保育を直接、見ることはできないことも多い。担任の書く日々の記録を読むことで、各学級の遊びの様子や人間関係、幼児たちの育ちなどの状況が分かり、担任の保育の捉えや今、指導で悩んでいることが把握できる。
- 担任は、管理職等のコメントを読み、幼児の見方が多面的になり、幼児の育ちを実感したり、自分の指導の方向を見いだしたりできる。
- 幼児理解を深め、指導の評価の妥当性や信頼性を高めていくためには、こうした保育の記録を複数の教員の目で見て、多面的な見方、考え方をしていくことが有効だと思われる。
- 「10 の姿」は留意点にあげられているように到達目標ではなく、個別に指導するものではないが、この実践のように日々の記録が累積されていくことによって、一人一人の幼児の発達する姿を多様な視点から、長期的に捉えることができるものと考える。

取組事例４　多様性を尊重する教師の援助と学級経営

質問紙調査で、新要領の理解推進の取組として園長等と担任が最もよく話し合ったのが、「特別な配慮を必要とする幼児への指導」であった。近年、外国籍幼児の在籍が増える傾向で、訪問調査協力園にも１学級に６名が配慮の必要な幼児や外国籍の幼児が在籍している学級があり、担任が難しさを感じながらも多様性を尊重し、一人一人のよさを発揮させようと工夫していた事例である。

１　５歳児Ａ学級の課題と工夫

担任からの聞き取りで、援助の課題と対応の工夫を整理すると、以下のようであった。

＜指導上の課題＞	＜教師の対応＞
身支度等、個人のペースに差があり、学級で集まろうとすると時間がかかる。	踊りが好きな幼児が多いので、音楽をかけて楽しい雰囲気をつくり、集まりやすくする。
集中して話を聞くことが苦手な幼児が半数いる。また、「分からない」と言えない幼児が多い。	視覚的な教材を使用したり、聴覚を刺激したりしながら話すことを試みている。
自分で気付いて行動することが難しい。	幼児がよく見る場所を意識して、表示を貼ったり時計を置いたりしている。
目の前の事象にふいに意識が向いてしまうこともあり、グループ活動が進まない。	協同も大切であるが、幼児がのびのびとできるような自由な雰囲気も大切にしていく。
素材や教材を使用する際、思い通りに使えなかったり、必要な大きさや量の加減が難しかったりする。	やりたいことを実現できるように、素材を事前に切っておくなど、個に応じた教材準備を心掛ける。
学級全体で確認したり約束したりしたことが流れてしまい、常に達成できない状況になる。	達成可能なことであるか、約束を守りやすい内容なのかを、検討する必要がある。少し頑張れば達成できるものにし、「達成できた」経験を増やしつつ自信を積み重ねていく。

２　担任が心掛けていること

(1) ５歳児ということもあり、「話し合いをさせなくては」と焦りがあると、担任も幼児も苦しくなってしまう。教師は、幼児同士で話が伝わりづらい状況であることを理解したうえで、幼児の気持ちを説明したり、「Ｄちゃんにも聞いてみよう」と他児とつなげたりしていく。言葉以外の表現も受け止めながら、教師がモデルとして発言していく。

(2) 個々のよさを見いだし、遊びや生活の中でそのよさが活かされる状況をつくる。また幼児が他者から認められることで、自分のよさに気付けるようにしていく。
(3) 園長や主任からのアドバイスを受けながら明日の保育の準備をする。多様な考えを聞きながら進めていくことで教師自身が見通しをもちやすくなり、幼児への適切な援助へとつながりやすい。

3　多様性を尊重するための教師の援助

(1) 自分たちが楽しめる仲間の関係性を生み出す

本学級では、障害のある幼児や外国籍の幼児が自然と関わり合いながら遊んでいる。グループ活動では、自分本位に行動してしまう幼児がいたり、言葉でのやりとりが難しかったりするためグループで話し合うことができない場合もある。しかし、話し合いができなくても、周囲の幼児は、友達と日々関わって遊んでいることで、相手の特徴や性格を概ね理解していて、勝手な行動をしてしまう幼児に対し、「まあ、いいかな」と時には見守ったり、「この部分は自分がやろう」と手伝ったりする場面もある。

また、自分本位ではあるが発想が豊かなど、その幼児のよさが発揮されることもある。担任がその姿を認め、伸ばしていくことで幼児は喜び、学級の中での存在感につながる。幼児にはそれぞれのペースがあり、他者との違いがある。違いを認め生かし合いながら、皆と一緒にいることが心地よくなる風土をつくることが温かい学級経営につながる。

(2) 個々に応じた環境を構成する

5歳頃には、様々な物の特性や使い方が分かり、身近な素材や道具を遊びに生かすようになってくる。しかし、幼児の中には物を使うときに量の加減が分からなかったり、目の前の現象に意識が向き、よく考えずに使ったりする場合もある。訪問園においても、担任がごっこ遊びに用意したスポンジを、ハサミで切り刻むことが面白くなってしまい、そのうちに、なぜ切っているのか分からなくなってしまう場面があった。

担任は、単に素材を置くだけではなく、個々の幼児がこの素材をどのように手に取り使うか予想したり、タイミングよく出したりする必要がある。また、幼児の特性や技能に応じた用具の準備、教材の提示も必要で、あらかじめ適切な大きさに切っておいたり、型紙を置いたりするなどの配慮が、幼児のやりたいことを実現させる援助となる。

(3) 園内体制を整え、学級経営を支援する

訪問調査協力園では、園長や主任が、担任に日常的にアドバイスをしている。遊園地ごっこでは、進め方や物を置く位置や向きなど、援助の方法を一緒に考えている。園長の専門的知識や保護者の背景なども含めた幅広い視点での考え、主任のこれまでの保育の実践知による予測、担任としての個々の幼児の把握や保育の願いなどを、対話の中で生かし援助の方向性を決めていく。また、外部機関や外部講師とも連携し、多角的な視点から援助が考えられるようにすることは、具体的で適切な支援の方法につながる。

配慮を要する幼児が多くなると、専門的な知識を踏まえた個別の支援が多様になる。そして、その幼児の保護者の気持ちに配慮し、思いを受け止めながら対応する機会が多くなり、とても担任だけでは抱えきれない状況になる。園として、幼児や保護者への支援も必要であるが、担任を支える園内体制を整えていくことが重要である。

取組事例５　園内研修の工夫

預かり保育による保育の長時間化や勤務体系の多様化などにより、園内の教師等、全員が一堂に会して共通理解を図っていくことが難しくなっている園も多い。訪問調査協力園が困難な状況の中、時間の取り方を工夫したり、共通理解の方法を日常の教育活動の中に入れ込み研修の日常化をしたりするなど、園の実情に応じた様々な工夫の事例である。

１　要領改訂を機に園全体で保育を見直し、教育課程改善につなげる

Ｃ園は、幼児教育の質向上に熱心に取り組み、色彩感覚を大切にした環境づくりに力を入れてきた歴史がある。また、雪が多く運動量が不足しやすい地域の実情を捉え、外部講師を招いて運動的な活動を行っており、伝統的な行事を大切にしている園である。教師は、そうした活動の充実に向けて努力するが、保育の工夫を共有する時間がとりにくい実情があった。管理職は、要領改訂を機に、教師同士が保育について語り合う中で、保育の方向性を共有したり、幼児の遊びの中の学びや主体性の発揮についての共通理解を進めたりすることによって自園の保育を見直していきたいと考えた。

(1) 講師を招聘し講師と共に、自園の伝統的な行事や保育の意味を捉え直す

講師は、新要領の趣旨について、各学級の保育と関連付けながら解説を行った。その後、行事や当日の保育について協議し、自分の保育と関連付けて振り返ることによって幼児の姿を「経験の内容」「遊びの中の学び」という視点から見直し、保育について語ることの楽しさや意義について、教師の意識化を図る機会にした。

(2) 幼児の姿（写真）を基に話し合い、「遊びの中の学び」について共通理解する

経験の少ない教師にとっては、研修会の中で自らの保育や同僚の保育について語ることに気後れを感じている教師もいる。園内研修では、他者の意見に耳を傾けるだけでなく、一人一人が自分の考えを率直に話し、幼児理解を深めたり明日の保育のヒントを得たりする喜びを実感できるようにする必要がある。

そこで講師は、当日の保育における幼児の姿を写真撮影しておき、「遊びの中の学び」について解説した後、全員協議において写真を提示し、その場面における幼児の学びの可能性についてそれぞれの教師が思いつくことを話し合う場面を作り、遊びの中に多様な学びの可能性があることを教師が感じ取れるようにした。そして、担任から幼児の遊びの様子の受け止めも聞き、遊びの中の学びは同じ場面の中でもそこにいる幼児一人一人の学びが異なるということを共通理解をすることができた。これによって、日頃意見を言いにくい教師も自由に発想を広げて発言することができ、イメージを出し合う体験になった。このように誰でも安心して自分の考えを出し合い、伝え合うことを通して、保育を振り返り、学び合うことの大切さを実感する機会となっている。その中で、教師は正解や結論を出すのではなく、互いの保育について話し合い、幼児のよさや可能性を発見したり保育のヒントを得たりする喜びを感じられる。こうした園内研修実施の結果、教師から以下のような感想があり、新要領の趣旨を実践的に学ぶ機会になったことが伺える。

＜園内研修会後の感想（要約）＞

・写真から捉えられる幼児の学びについて話すという機会は、自分の考えを明確にしていく学びになり、また、人の話を聞き自分の考えを広げる機会になった。また、１日に１枚は写真を撮り、職員と学びの可能性を考える機会を作りたい。（管理職のコメント）

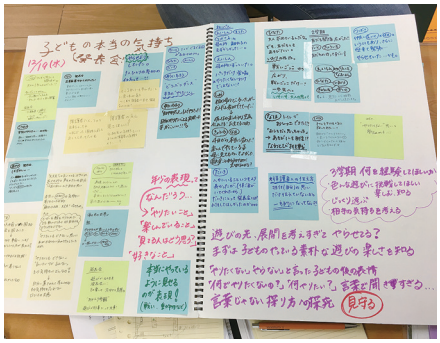
・幼児がやりたいということに取り組めるようにし、その中で幼児がしていることを見守ることに挑戦している。様々な工夫や学びがあることに気付いた。今までは、失敗しないやり方を教えていた。保育の見方を学んだ。

・「遊びの中の学び」を豊かにしていくためにも「資質、能力」について学びたい。

２　朝の打合せで各学級の保育を伝え合い、教師の伝える力・表現力を高める研修にする

Ｄ園は、担任一人一人が自分の考え、保育観をもち、それを保育に反映していく力を育みたいと様々な取組をしている。その一つとして、毎朝の打合せ時に各担任が本日の学級の保育の意図と内容、課題を一人１分半という短い時間で伝えることを園内研修として実践している。これは、目に見えない保育の意図や内容を人に伝わる言葉で表す機会となり、他の教師の話を聞いて自分の表現や伝え方を学ぶ場にもなっている。また、言葉にすることで、あいまいだった自分の考えが明確になっていき、保護者や関係機関に園の保育の理解を図っていく上でも大きな力になっていくことが期待できる。

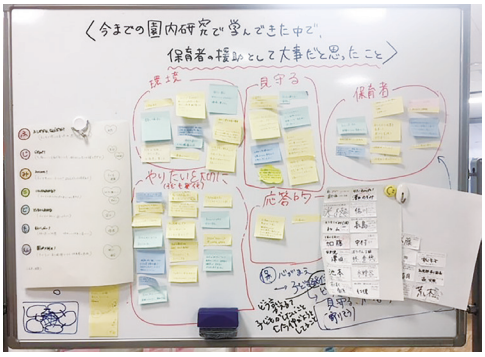
３　協議内容を見える化し、共通理解を図り、保育改善の過程を把握できるようにする



Ｅ園では、園内研修会での協議内容や教師の考えをＦ８サイズのスケッチブック見開きに付箋や記号、図などで表し、それを真ん中にして協議を進めている。全員が同じ物を見て協議をするので共通理解されやすい。

また、学びが見える形で残り、担任等の満足感や達成感にもつながり、スケッチブックに協議内容が記録として残り、いつでも振り返ることができる。

さらに、協議内容を限られたスペースに書き表すために、自分の考えをまとめ、他の人の話の要点を捉える力も培われる場になっている。



Ｆ園の預かり保育は、18：00まで実施している。担任も預かり保育に週１～２日関わるので、月に１回程度行われる園内研修会には、預かり保育の当番の日は参加できない。そのため、当日の記録とともに、参加した担任等が、終了後、２～３日のうちに感想や学んだことを必ずメモしてボードに貼り、学びを伝えるようにしている。参加できなかった担任等は、このメモを見て、日々の会話の中で確認したり、質問したりすることができ、学び合いの場になっている。また、メモが１枚のボードになるので、学びの内容や課題が見えるようになり、共有されやすくなる。メモとして書くということで、学びを振り返り、より確かなものにする場になっている。さらに、広く自分以外の考えを知る場となり、保育の見方、自分の考えや学びを広げ、深める場にもなっている。

取組事例６　カリキュラム・マネジメントの意識化

教師が行っている保育の振り返りや改善策の検討が、カリキュラム・マネジメントにつながっていることを示し、それを意識化することによって組織的・計画的に教育活動の質向上を図るカリキュラム・マネジメントの推進につなげる必要を示す事例である。

１　カリキュラム・マネジメントのイメージをはっきりもっていない現状

質問紙調査では、カリキュラム・マネジメントについて園長・担任等ともに意識している割合は低く、自由記述の中でも「カリキュラムの再構成に時間がかかる」「カリキュラム・マネジメントの具体的方法、工夫が知りたい」など、実施に課題を感じている姿が浮かび上がっている。

また、訪問調査において学級担任は、「改訂に関する研修で、カリキュラム・マネジメントについて説明を受けたが、具体的なイメージがはっきりとしていない」という回答をしていた。

２　カリキュラム・マネジメントの種は、日々の保育の振り返りの中に在る

Ｇ園では、図１のように週案検討会議で幼児の様子を共通理解し、次週の保育の内容を検討した共通の事柄について黒い字で表記し、その上で各学級の実態に即した活動の内容や留意事項を赤い字で追加表記している。こうした作業が園全体の課題を共有した日々の保育のPDCAサイクルであり、この積み重ねが中・長期の指導計画の評価・改善の資料となり、教育課程のPDCAの質を担保することにつながるのである。

教師は保育の振り返りと考え、カリキュラム・マネジメントとして意識していない状況ではあるが、これこそが組織的かつ計画的に園の教育活動の質向上を図るカリキュラム・マネジメントの始まりであると考えられる。なぜならば、図２に示すように、教師は、週案や日案を作成するに当たり、週案作成会議において、学年の幼児の育ちを共通理解・共有して、ねらい・内容を設定している。また、実施に当たっては、人的・物的環境を十分に確保するように環境を構成し、指導を工夫する組織体制が機能しているからである。

学年の共通理解と学級の独自性を尊重した週案（例）

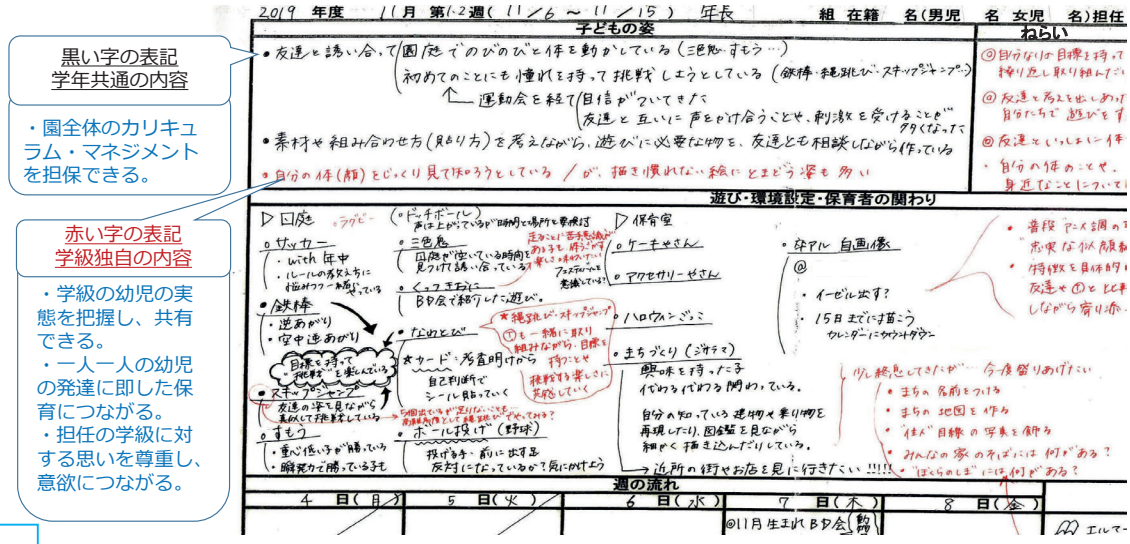


図１

そして、保育の振り返り（評価）の際には、自らの保育を振り返り一人一人の幼児や学級の育ちを確認すると同時に、幼児の学びと関連付けて自らの指導や教師間の連携・物的な環境についても評価し、明日の保育につなげている。このように考えたとき、教師が日々行っている週日案の計画・実施・評価・改善は、カリキュラム・マネジメントの始まり（種）であり、保育場面におけるカリキュラム・マネジメントということができる。

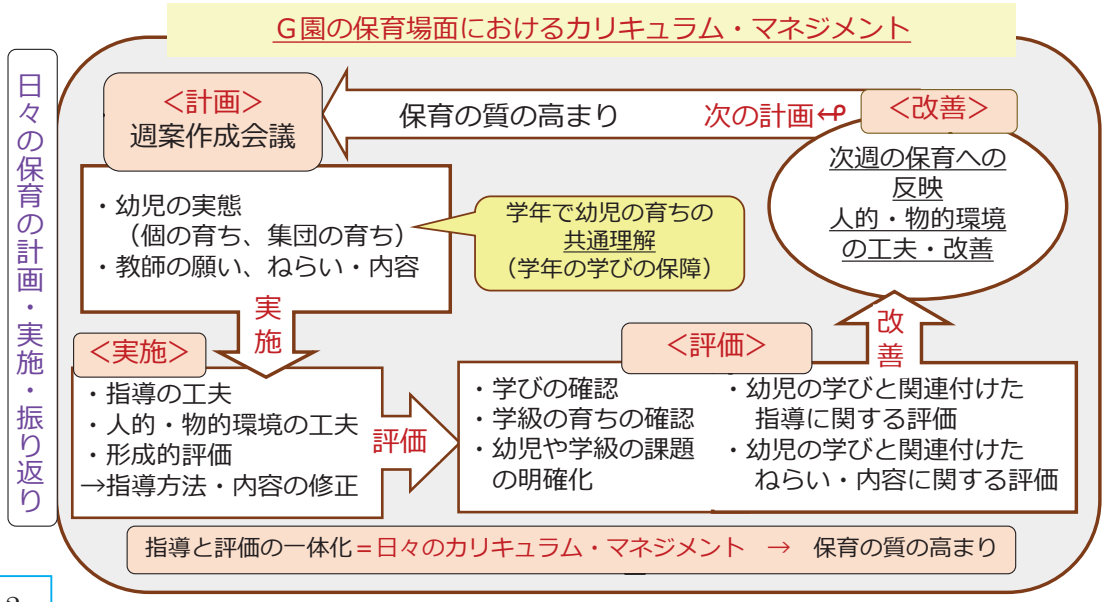


図 2

3　カリキュラム・マネジメントの推進のため、日常の教育活動の意識化が重要である

このような日々の保育の PDCA サイクルを積み重ね、図 3 に示すように期や学期で評価し、年度末に教育課程の実施状況を評価するとともに、人的・物的体制を確保して改善を図っていくことを通して、組織的・計画的に各幼稚園の教育活動の質向上を図っていくカリキュラム・マネジメントの実現につながることになる。

そこで、カリキュラム・マネジメントの推進につなげる方策は、教師が、日常の指導計画作成・実施の中で保育内容だけでなく、人的・物的環境を工夫していることが、カリキュラム・マネジメントにつながっていることを意識化することが重要と考える。

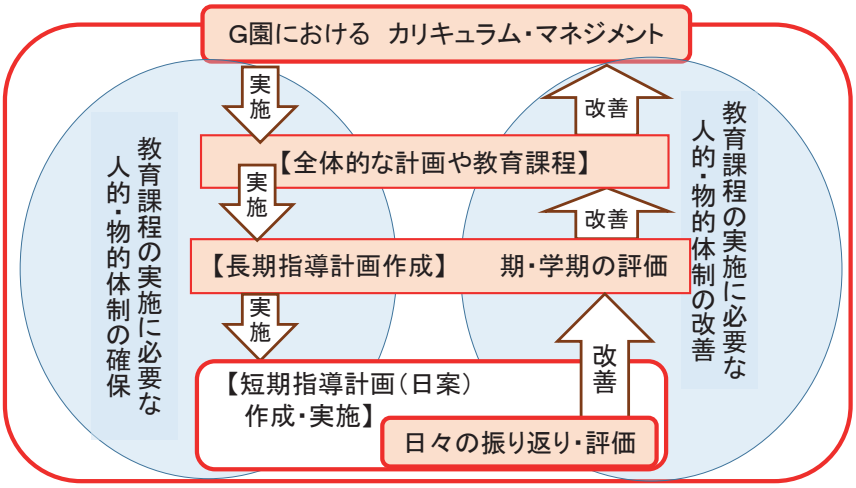


図 3

取組事例７　社会に開かれた教育課程

新要領に「教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの幼稚園において、幼児期にふさわしい生活をどのように展開し、どのような資質・能力を育むようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。」と明記されている。このことを踏まえて、園の教育の全体像を保護者や地域に分かりやすく表現し、幼稚園教育を見える化し、発信している取組の事例である。

１　家庭や地域と連携し、幼児・保護者・教職員が共に育つ幼稚園を目指して

Ｈ幼稚園は、目指す幼稚園像の一つとして「家庭や地域と連携し、幼児・保護者・教職員が共に育つ幼稚園」を掲げている。そして、幼児教育への保護者の理解を深め、共に育てていくという意識を高めるために、家庭教育学級や保護者会を年間５回以上実施し、ホームページを月２回以上更新するなど、幼児教育・子育てに関心がもてるように園からの発信の強化を図っている。

さらに、園の教育をより具体的に分かりやすく発信できるよう「Ｈ幼稚園グランドデザイン」と称して、園の教育の全体像を手に取って読みたくなるように、A4 判１枚にイラストを交えて作成し、配布している。（P65 参照）そこには、園の教育目標を実現するために、今年度重点にすることは何か、どのような資質・能力を育むのか、目指す幼児像、目指す幼稚園像、目指す教師像の他、遊びを通して育む園の具体的な教育活動を関連させている。目に見えて、園の教育が把握しやすいため、保護者や地域からは「分かりやすい」と好評である。

園の教育活動の全体像を、「読みやすい」「分かりやすい」を視点に工夫して発信することが、園の教育活動への理解を深め、保護者や地域と園の教育目標や目的を共有しやすくなる。このことが、地域や保護者が園の教育に積極的に参加する意識を高めるという園の経営目標の実現につながると期待される。

この取組が保護者や地域の人々とつながりながら教育活動を進めていく「社会に開かれた教育課程」の実現につながっていく。

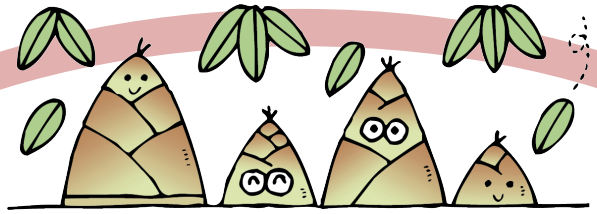
２　幼稚園の特性を生かして

この園は、園の教育を保護者や地域と共に創っていくという視点を大切にしている。他校種と比べて、家庭との関係において緊密度が高い幼児教育においては、重要なことである。幼児の実態を踏まえ、地域の特色等を生かしながら、これからの社会の中で、どのような力を育むことが必要であるのか長期的な見通しをもち、それを保護者や地域と共有していく取組を工夫していくことが大切である。

2019年度　〇〇区立〇〇幼稚園グランドデザイン

ぐんぐんのびろ　〇〇幼の子

教育基本法
学校教育法
幼稚園教育要領



〇〇区教育大綱
〇〇区教育委員会の教育目標
同基本方針
〇〇区教育ビジョン
〇〇区幼児教育
共通カリキュラムちいさな芽

教育目標　元気いっぱい　夢いっぱい　やさしい心の〇〇の子

魅力ある教育活動
〇〇区の支援を受け、直接体験活動を実施
親子栽培　お茶会　昔遊び
異文化交流　コンサート

本園の重点目標
幼児期を幼児らしく！！
生活や遊び　異年齢交流や異校種交流
魅力ある教育　学びのキャンパスプランニング

学びのキャンパス プランニング事業
〇〇区の人材を活かして、様々な体験活動を実施

目標達成のための基本方針

危機管理 に努めます	自主性 を育てます	規範意識 を育てます	自己肯定感 を大切にします	特別支援教育 を推進します
資質向上 を目指します	協同性 を育てます	連携 を進めます	直接体験 を重視します	オリ・パラ教育 を推進します

目指す幼児像
★体をよく動かして遊ぶ、健康な幼児
★人や自然を愛し、心の豊かな幼児
★好奇心をもち、進んで考え創意工夫をする幼児
★友達と助け合い、楽しく遊べる幼児

〇幼児期を幼児らしく、のびのびと豊かに生活できる幼稚園
〇保育の質の向上を図り、個の育ちと協同的な学びの場を保障する幼稚園
〇家庭・地域と連携し、幼児・保護者・教職員が共に育つ幼稚園

「遊び」を通して「生きる力の基礎」を培います！

目指す教師像
★保育を楽しみ一人一人の育ちを大切にする教師
★互いに信頼し合い協力し合う教師
★向上心をもち自己研鑽できる教師
★保護者、地域と連携し園経営する教師

いろいろな国のお友達がいます！

幼小の交流がとても盛んです！

自分の興味のあることにじっくり関われる！

地域の行事に参加し、遊びに生かします！

（3）訪問調査から捉えた実施状況と課題

訪問調査協力園での保育参観とインタビューによって、各園において新要領を踏まえて様々な取組がなされている様子、幼児の遊びや生活の姿を捉えるとともに、教師がどのような視点で保育を計画・実施・評価しているかについて、以下のような実情と課題を捉えることができた。

【新要領の趣旨を踏まえた教育の実現のための各園の取組について】

① 園が実践してきた教育活動全体を見直す取組を進めている

新要領の内容を理解する過程で、管理職・担任等が学び直し、これまで行ってきた行事や環境の見直しをしている園や、改訂をきっかけに教育課程、指導計画の再構築をするために、園内研究を進めている園、職員の意識改革をすることを目的に園内研修の方法を模索する園などがあった。

② 要領に示された内容から視点を捉えて園内研修を進めている

「幼児の主体性を大切にする保育とは具体的にどのようなことなのか」を共通理解し、実践するために各担任等が自身の保育を見直そうとして園内研修を実施している園、「10の姿」や「幼稚園教育で育みたい資質・能力」（以降「育みたい資質・能力」と表記）を参考にして、幼児の学びを分析・考察し、研究発表をしている園などがあった。

③ 園が進めてきた研究を更に進めながら、新要領の趣旨を踏まえた実践につなげている

これまで各園が先進的な取組をしてきたこと、例えば、ドキュメンテーションや教材研究などについて、更に深めたり効率的な運営を試みたりしている園もあった。

④ カリキュラム・マネジメントについて、明確なイメージがもちにくい様子がある

インタビューの中で、カリキュラム・マネジメントについて、管理職は、しっかりマネジメントできているか不安であるとの回答が多く、学級担任は、「改訂に関する研修で、カリキュラム・マネジメントについて説明を受けたが、具体的なイメージがはっきりとしていない」という回答もあった。カリキュラム・マネジメントについて、明確なイメージがもちにくい様子があることが分かった。

しかし、ある園では、週案検討会議で幼児の様子を共通理解し、次週の保育の内容を検討した共通の事柄について黒い字で表記し、その上で各学級の実態に即した活動の内容や留意事項を赤い字で追加表記するなど、園全体の課題を共有しながら日々の保育のPDCAを好循環させていた。また、この記録の積み重ねを中・長期の指導計画の評価・改善の資料とし、教育課程のPDCAの質を担保していた。こうした作業がカリキュラム・マネジメントの基本となることを教職員が意識することが、カリキュラム・マネジメントの具現化につながると考える。

【保育の展開と幼児理解に基づいた評価について】

① 発達の特性を捉えた保育が展開されている

各園では、新要領を受けて、様々な取組がなされていた。その具体的な姿については、前掲の12事例に示しているが、3・4・5歳児が、それぞれの発達に応じて力を発揮して

遊び、自分なりの課題に取り組んだり友達との関わりを楽しんだりするなど、多様な園生活を展開している姿が見られた。

例えば、3歳児では感じたり考えたりしたことを自分なりに表現する姿、4歳児では多様な動きや表現のための基礎的な技能を獲得する姿、5歳児では自分がやってみたいことをやり遂げる体験から自信をもつ姿や目的を共有し、葛藤体験を重ねながら、協力して作り出す遊びや生活する姿が多く見られ、それぞれの学年における教師の援助や環境構成の工夫を捉えることができた。

② 遊びの中の幼児の学びの読み取り方をどのようにすればよいか、迷っている園もある

幼児が主体的に活動し、多様な遊びを展開している姿が多くの場面で見られた。その背景として、遊びを充実させる遊具や材料などの教材があり、それぞれの興味・関心に応じて遊んでいる姿が見られた。しかし、中にはその遊びの中で、深い学びをどのように捉えればよいかと迷う場面も見られた。

③ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて幼児の学びを捉える園が多い

多くの幼稚園で、「10の姿」を踏まえて幼児の発達や変容を捉えようと試みている。入園から修了までの発達の連続性を「10の姿」で捉えることで、幼児理解を深めていこうとする取組を工夫している姿が見られた。例えば、日々の記録から、「10の姿」につながる記述を見付け、印をつけたり、その記載について園長がコメントを付けながら「10の姿」に関する共通理解につなげたりしている園や、担任が1か月ごとに幼児の育ちを確認している園があった。

しかし、「育みたい資質・能力」を踏まえて幼児の学びを捉える取組をしていた園は、訪問調査協力園の中では1園のみで、「育みたい資質・能力」に対する意識が低いことが伺えた。

ともすると、「10の姿」を視点とすることが目的化し、項目別に捉えたり指導計画等に直接的に反映したりすることも危惧される。「10の姿」を活用する意義や方法を再確認するとともに、幼児の学びを捉えるに当たっては、「育みたい資質・能力」が一体的に育まれていることについて再確認する必要があると考える。

【運営の工夫について】

① 担任等の資質向上に向けた育成の日常化

管理職も担任も、担当する園務や保育時間の増加等により、多様な課題、保育に係る時間が長くなる・園内研究の時間が足りない等の実態がある。

担任等は、保育を振り返り、様々な形で記録したり省察したりしながら、明日の保育を構想している。その過程にこそ、幼児に関する理解の深まりがあり、明日の保育へのヒントがある。しかし、その理解の深まりやヒントについて気付かずにいることがある。このことに気付いた園長は、情報交換、振り返りの時間を確保するために「3時に会いましょう」という合言葉によって時間を確保し、毎日30分ほど、保育に関する共通理解をする時間をもっている園があった。また、毎週担任から提出される「保育の記録」を基に、管理職の気付きを書き加えることで、担任と管理職の往還的な記録のやり取りをする園などがあり、幼児理解、発達への理解、保育の工夫等に関する担任等の育成を、日

常行っている職務の中に埋めこみ、日常化させるように工夫していた。

② ドキュメンテーションによって共通理解を効率化し、実効性を高める工夫

保育後の振り返りを全員で行う際に、大型のスケッチブックを使用し、ドキュメンテーションの手法で行っている園があった。保育の振り返りをイラスト、写真、文字等で書き込み、管理職と学級担任等が共有できるものを作っている。写真を使うことで、表情、保育の場面の様子等、言葉では伝わらないことが一目瞭然で伝わるので、ドキュメンテーションの作成過程で、教員の保育の見方、幼児理解、読み取ったことの表現の仕方、写真を撮る視点などが育ち、時間短縮につながっているとのことであった。

③ 指導計画の立案と改善の方法を簡略化し、効率的に PDCA を行う工夫

これまで研究を重ねて作成した指導計画を活用し、それを各学級の様子に応じて修正しながら実践し、その結果を記入していくことが、即改善につながるような記録方法を工夫している園もあった。具体的には、年間指導計画（月案）をコピーしてそこに加筆・修正することで指導計画立案として作業の簡略化を行うと同時に、朝会時の口頭連絡の充実による効率的な取組をしていた。その園においては、「各教師が限られた時間の口頭連絡の中で、自らの保育計画を言語化することで保育の目当てが明確になった」、「他の教師との目当ての共有ができることで、若手教師にも分かりやすく、全教師間で指導計画の共有ができる」等の成果があったとのことであった。

【教材開発について】

訪問調査協力園の実践の中には、多くの教材開発の積み重ねがあり、園の文化として引き継がれたり、教師同士の口伝で引き継がれたりしていた。

① 幼児の学びに着目した教材の開発や、園がもつ文化の伝承が行われている

主体性を活かした保育を実践するための工夫として、幼児が豊かに生活、遊びを進めていくために、園がこれまで研究を重ね、作り出した教材や環境の構成等についての研究を更に進めている園があった。この園では、教材というと教える材料のように誤解されることを避け、環境として存在するものや場が、幼児の遊びや学びを誘発する素材等であることを目指し「誘遊財」と命名し、園の文化としてブラッシュアップしながら教材や環境等を教師の援助の考え方等とともに引き継いでいた。

② 同僚教師の優れた実践を真似たり教材を借りたりする風土がある

園の中に、教材等に関する関心が高く、自ら指導法を工夫したり教材を購入して保育に使ったりしている教師がおり、そうした積極的に保育の工夫をする姿から学ぶ教師やその教材を借りて保育に活かそうとする周囲の教師の姿が見られた園もあった。

このように保育の質を高めようとするリーダー的な役割を果たしている教師の存在は、園全体の保育の質向上に一定の成果を上げているが、こうした努力が、園内研修等の中で教材開発として位置付くと、園全体の組織的な学び合いとして機能し、更に意味のあるものにつながると考える。

【地域と共に行う幼児教育の質の保障と幼小の接続】

① 園の教育を保護者や地域と共に創っていくという視点を大切にしている

ある市では、「市全体の幼児教育の推進・質の向上」「私立幼稚園・保育所等とのよりよい連携」を目的として事業を行っており、その一環として、公私幼保等の幼稚園教諭・保育士が共に学ぶ機会を提供し、地域の幼児教育の質向上に向けた取組として近隣幼稚園、保育所との研究会を実施している園もあった。

それらの研修会や調査研究を通して、参加者からは「他園の取組を聞き、参考になった」「自園でもやってみたいことがたくさん見付かった」などの感想が出された。この取組が各園の教育の質向上につながっているとともに、地域の連携体制も深めている。

② 「10の姿」を意識した幼小連携・接続の研修がすすめられている

幼小連携・接続に関する研修会では、「10の姿」の具体的な姿を幼小の教師が共通理解し、共有するための研修が行われている園があった。

【多様な保育ニーズに対応する教師の力量】

① 特別な支援を必要とする幼児の特性に応じた環境を構成する

訪問調査協力園の中には、特別な配慮を必要とする幼児が学級の中に数人在籍し、学級経営に関する課題を抱えている園もあった。担任等は、それぞれの幼児の特性や技能に応じた用具の準備、教材の提示をするなど、環境の構成をしていた。

② 自分たちが楽しめる仲間の関係を作り出している

ある園の5歳児学級では、障害のある幼児や外国籍の幼児と自然と関わり合いながら遊んでいた。グループ活動では、言葉でのやり取りが難しく話し合いに至らない場合もある。しかし、話し合いができなくても、日常、関わって遊んでいることで相手の特徴や性格を自然に理解していて、時には見守ったり手伝ったりする場面もある。

また、その幼児のよさが発揮され、教師はその姿を認め、学級の中で引き出したり、他者との違いを認め生かし合ったりしながら、みんなと一緒にいることが心地よくなる風土をつくっていくことが温かい学級経営につながっていた。

③ 学級経営を支援する園内体制を整えている

園長や主任が担任に日常的にアドバイスをしている園もあった。園長の専門的知識や保護者の背景なども含めた幅広い視点での考え、主任のこれまで経験や実践知による予測、担任としての個々の幼児の把握や保育の願いなどを、対話の中で生かし援助の方向性を決めていた。

また、配慮を要する幼児の中には、専門的な知識を踏まえた個別の支援が必要な場合もある。外部機関や外部講師とも連携し、多角的な視点から援助が考えられるようにすることは、具体的で適切な支援の方法につながる。幼児や保護者への支援も必要であるが、中心となる担任を支えるためには、園はコーディネーターを中心に保護者、担任、専門機関と連携しながら、園内体制を整えていくことが重要である。

Ⅳ　提言
―両調査から捉えた新幼稚園教育要領の実施状況と今後の課題への対応―

質問紙調査からは、新要領の趣旨理解の取組と実践への園内体制、実践に関する管理職の工夫、保育の内容・方法の充実、評価の工夫等について、積極的に実践している姿が捉えられた。また、訪問調査からも、その具体的な保育の展開や実践の工夫が捉えられ、ほとんどの園で、新要領の趣旨を踏まえた保育を目指した実践が行われていると言える。

こうした教育現場の努力を支援し、各園の課題に応じた実践や課題解決のヒントとなるような事例や情報を提供していくことが今後求められると考え、以下のように提言する。

1　新要領の更なる理解推進によって、質の高い保育を保障する

9割近くの教師が「園長等管理職から説明を受ける」「園内研修会に参加」「園外研修に参加」「要領や解説書を読む」など何らかの方法で、新要領理解を図っていることが分かった。また、概ねその内容を理解して保育に取り組んでいることが両調査から伺えた。

しかし、1割近くがまだ、要領も解説も読んでいないと答えていることは課題である。要領は、国が示す幼稚園教育における教育課程の基準であり、公教育である幼稚園教育の実践者は、要領の趣旨を踏まえて保育を展開することは責務である。その意味においても、幼稚園の教師は新要領を精読し、示されている内容について理解を深め、専門性を高めることが求められる。そこで、各園においても折りに触れて要領・解説で内容を確認するなど、不断の理解推進が求められる。

2　各園の課題に応じて、組織的・計画的に園内研修を充実させるための支援を行う

質問紙調査では、管理職と教師の話し合いの程度と教師の保育に臨む際の意識や目指す方向性についての相関があることが分かった。また訪問調査においても、園内の共通理解の重要性が強調され、様々な工夫がされていた。また、新要領の実施を機に、これまで園の伝統としていた行事等を含め教育活動全体を見直すよう、園内研修の充実を図る園もあった。

新要領の趣旨の理解推進だけでなく、保育の充実を図っていくためにも、それぞれの園の教育環境や課題等の実情に応じて適切な研修テーマを設定し、教職員間で活発な意見交換や課題解決策の共有を行うなど、組織的・計画的に園内研修を充実させることが望まれる。こうした組織的・計画的な園内研修が充実するためには、園内研修の内容や方法に関する情報を提供し、実施できるような行政による支援が求められる。

3　日々の教育活動がカリキュラム・マネジメントにつながっていることを意識化し、理解推進策を講じる

質問紙調査において「カリキュラム・マネジメント」「社会に開かれた教育課程」などの実施に関する実施状況は、他の項目に比べて低い傾向があった。これについては、訪問調査のなかで、「具体的なイメージがもてない」などの声が聞かれた。しかし、「カリキュラム・マネジメント」としてではなく、日々の保育の振り返りとして、無意識にそれらに関わる様々な実践がなされていることが分かった。

このことから、日々の実践の意味を再確認し、新要領が示すカリキュラム・マネジメ

ントについて理解を深め、意識化できるよう周知を図る必要がある。

4　教育の質向上のため「カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施する学校評価」が望まれる

新要領では、新たに「各幼稚園が行う学校評価については、教育課程の編成、実施、改善が教育活動や幼稚園運営の中核となることを踏まえ、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意するものとする。」と示されている。学校評価については、本会が平成27年度に文部科学省の「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル事業」の委託を受けて、「幼稚園等における学校評価の実施状況と課題等に関する研究」を行っている。その中で、学校評価で自己評価は概ね実施されているが、その成果として、「自園の運営や教育活動のよさが確かめられた」「新たな課題を発見できた」「評価結果を次年度の園運営に反映できた」が高いのに比べると、「改善策が明確になった」「教職員の指導力の向上につながった」という項目は低かった。その原因として、各幼稚園は、学校評価の実施にあたり、評価項目・評価指標の設定方法について困難を感じており、学校評価の手順や方法等を示すモデルとなる資料が求められている現状が捉えられた。

これらことから、「カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施する学校評価」を行うことが、PDCAサイクルを通じた質向上のためには重要である。また、社会に開かれた教育課程を実現するためには、学校評価の結果を保護者や地域住民等に公表し、幼稚園の教育活動への参画を得て、幼児を共に育てることが求められる。

5　情報の可視化が共通理解のツールとして有効であり、実効性が期待される

質問紙調査では、多面的に幼児を理解するため「エピソード、写真、映像を活用する」という取組をしている園は少なかった。しかし、訪問調査園での実践から、幼児の姿、保育の流れを写真や映像などで可視化することが、教師の共通理解が短時間にできて具体的に進むこと、家庭や地域への情報の発信や理解が進み、実効性があることが分かった。

また、両調査において、新要領の趣旨理解を図るための時間の確保の難しさが明らかになった。こうした点からも、ドキュメンテーションやICTの活用など、情報を多面的、客観的に捉える取組の工夫が求められる。そして、その活用方法について望ましい方法や留意点を具体的に解説したり、資料を示したりすることが求められる。

6　「幼稚園教育において育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の意義や関係性について正しく理解し、適切に活用されるよう周知の工夫が求められる

両調査から、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用する意義や方法を再確認するとともに、「幼稚園教育で育みたい資質・能力」が一体的に育まれていること、指導の過程と育ちつつある姿を確認することの重要性を周知する必要があることが示唆された。

新要領総則第2には、「1　幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため、この章の第1に示す幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする。(略)」とし、育てたいのは「資質・能力」であることを示している。そ

して、「1 に示す資質・能力は、第 2 章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むものである」として、活動全体を通して「資質・能力」が育まれていくように保育の方向性を示している。さらに、「3　次に示す『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』は、第 2 章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園終了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである」と示し、指導の際に考慮することと位置付けている。

ねらい及び内容に基づく活動と「幼稚園教育において育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の意義や関係性について、各教師が正しく理解し、それらの活用が適切に行われるよう、周知の工夫が求められる。

7　主体的・対話的で深い学びについて、具体的にイメージできるような方策が求められる

質問紙調査では、評価の工夫を多面的に行っている様子が捉えられたが、訪問調査では、幼児理解に基づいた評価、妥当性・客観性のある評価の考え方について具体的にイメージできない様子が捉えられた。各担任等は、幼児一人一人が主体的に環境と関わる中で、周囲との対話や自分自身との対話（自己内対話）をすることの必要性については、これまでの保育の中でも実践してきておりイメージできるが、幼児の深い学びをどのように読み取るか方法を知りたいとのことであった。

遊びの中で、幼児がどのような学びをしているのか、どのような深い学びの可能性があるのか具体的な理解が進むよう、実践事例・資料の作成を行う必要がある。

8　「小学校教育との接続」の必要性や体制作りなど小学校の教員との共通理解を図る

「小学校教育との接続」については、管理職が困難として挙げている項目の一つである。このことについては、小学校の教師との必要感の温度差があり、その必要性などを発信し、共通理解を図っていくための更なる工夫が求められる。

資　　料

【調査用紙（園長・副園長、あるいは指導的役割を果たしている先生対象）】

新幼稚園教育要領の実施状況に関する調査

この調査は、貴園の新幼稚園教育要領に基づく教育実践への取組状況についてお聞きするものです。
回答結果は別紙に記した文部科学省委託研究、及び成果の普及以外の目的には使用いたしません。
また、回答結果は全てコンピューターに入力しデータとして処理され、回答用紙はシュレッダーにかけ廃棄されます。
回答された園や名前が公表されることは、一切ありません。御協力よろしくお願いいたします。

当てはまる記号に○を付けてください。( ) には、数字を入れてください。(10 月 1 日現在)

1. 貴園は　a. 国立　b. 公立　c. 私立

2. 貴園は　a. 幼稚園　b. 幼稚園型認定こども園

3. 学級数　満 3 歳児 (　) 学級　3 歳児 (　) 学級　4 歳児 (　) 学級　5 歳児 (　) 学級

4. 園児数　満 3 歳児 (　) 人　3 歳児 (　) 人　4 歳児 (　) 人　5 歳児 (　) 人

5. 貴園は　預かり保育※を　a. 実施している　b. 実施していない

※教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動で、本調査では、定期的に行っている場合を示します。

問 1　新幼稚園教育要領の理解を進めるための取組についてお伺いします。以下の各項目について、当てはまる数字に○を付けてください。

		十分行った	行った	少し行った	行っていない
1)	新幼稚園教育要領全体の趣旨や要点を、管理職などが教職員に解説した	4	3	2	1
2)	新幼稚園教育要領の周知に関わる研修会に、教職員を参加させた	4	3	2	1
3)	外部講師を招いて学ぶ機会を設定した	4	3	2	1

問 2　以下の各項目について、教職員とどの程度話し合いましたか。当てはまる数字に○を付けてください。

		とてもよく話し合った	よく話し合った	少し話し合った	あまり話し合っていない
1)	社会に開かれた教育課程	4	3	2	1
2)	環境を通して行う教育	4	3	2	1
3)	幼稚園教育において育みたい資質・能力	4	3	2	1
4)	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	4	3	2	1
5)	カリキュラム・マネジメント	4	3	2	1
6)	全体的な計画	4	3	2	1
7)	主体的・対話的で深い学び	4	3	2	1
8)	幼稚園教育要領の各領域に示されているねらい・内容	4	3	2	1
9)	幼児の発達を踏まえた言語活動	4	3	2	1
10)	遊びの中での学びの理解	4	3	2	1
11)	遊びの質を高める教材の工夫	4	3	2	1
12)	保育の記録や振り返りの工夫	4	3	2	1
13)	幼児理解に基づいた評価	4	3	2	1
14)	特別な配慮を必要とする幼児への指導	4	3	2	1
15)	小学校教育との円滑な接続	4	3	2	1
16)	地域の教育資源の活用	4	3	2	1
17)	幼児の主体性を意識した園生活の流れ	4	3	2	1
18)	預かり保育の充実	4	3	2	1
19)	子育ての支援の充実	4	3	2	1

問３　以下の各項目について、どの程度行っていますか。当てはまる数字に〇を付けてください。

		とてもよく行っている	よく行っている	少し行っている	あまり行っていない
1）	教育目標などを踏まえた総合的な視点から全体的な計画・教育課程・指導計画を作成している	4	3	2	1
2）	「幼稚園教育において育みたい資質・能力」を踏まえて指導計画を作成している	4	3	2	1
3）	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて指導計画を作成している	4	3	2	1
4）	教育課程とその他の指導計画（保健・安全・預かり保育など）が一体的に展開できるようにしている	4	3	2	1
5）	保育の振り返りを共有するために、映像や音声を活用するなど記録方法を工夫している	4	3	2	1
6）	記録を効率的に行うためにICT（情報通信技術）を活用している	4	3	2	1
7）	保護者への情報提供にICT（情報通信技術）を活用している	4	3	2	1
8）	保育を評価する際、発達を捉える基準などを設定している	4	3	2	1
9）	教育課程の実施状況を定期的に評価して改善を図っている	4	3	2	1
10）	学校評価をカリキュラム・マネジメントと関連付けながら行っている	4	3	2	1
11）	地域の自然や人材、行事や公共施設などの地域の資源を活用している	4	3	2	1
12）	幼児が主体的に関わりたくなるように環境を構成している	4	3	2	1
13）	「主体的・対話的で深い学び」が生まれるように保育形態や指導方法を工夫している	4	3	2	1
14）	幼児が身近な事象に積極的に関わる中で思考力の芽生えを培っている	4	3	2	1
15）	小学校教員と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有している	4	3	2	1

問４　新幼稚園教育要領を踏まえた保育を実践するために行ったことは何ですか。以下の各項目について、当てはまる数字に〇を付けてください。

		とてもよく行った	よく行った	少し行った	あまり行っていない
1）	幼稚園教育要領に応じたテーマで、園内研修を行った	4	3	2	1
2）	教職員が園外での研修に参加しやすい体制を整えた	4	3	2	1
3）	園内や外部に向けて保育を公開し、研究協議を行った	4	3	2	1
4）	教員が保育を振り返り、評価・改善を行う時間を十分確保した	4	3	2	1

問５　新幼稚園教育要領告示以降、教員の保育内容・方法に関する意識が変わったと感じたことを簡潔にお書きください。特にない場合は、空欄にせず「なし」とお書きください。

（　　）

問６　新幼稚園教育要領に基づき保育をすることによって、幼児の様子が変わったと感じたことを簡潔にお書きください。特にない場合は、空欄にせず「なし」とお書きください。

（　　）

問 7-1　新幼稚園教育要領に基づいて保育を展開する上でどの程度困難さを感じていますか。当てはまる数字に〇を付けてください。

1）困難をあまり感じていない　　2）困難を少し感じている
3）困難を感じている　　4）困難をとても感じている

問 7-2　上記の質問で、2)、3)、4）のいずれかに回答された方にお聞きします。困難と感じていることを１つお書きください。

（例.「〇〇〇の具体的イメージがつかみにくい」「〇〇の具体的な方法が知りたい」など）

（　　）

御協力ありがとうございました。

公益社団法人全国幼児教育研究協会
e-mail: admin@zenyoken.org

※アンケートの回答について、情報提供していただける方は、園名と電話番号を御記入ください。
後日、本会より連絡を入れさせていただく場合があります。よろしく御協力ください。

園　　名（　　）
電話番号（　　-　　-　　）
e-mail（　　）

【【調査用紙（担任教諭対象）】

新幼稚園教育要領の実施状況に関する調査

この調査は、あなたの新幼稚園教育要領に基づく教育実践についてお聞きするものです。
回答結果は別紙に記した文部科学省委託研究、及び成果の普及以外の目的には使用いたしません。
また、回答結果は全てコンピューターに入力しデータとして処理され、回答用紙はシュレッダーにかけ廃棄されます。
回答された園や名前が公表されることは、一切ありません。御協力よろしくお願いいたします。

当てはまる記号に○を付けてください。（ ）には、数字を入れてください。（10 月 1 日現在）

1．通算勤務年数　a. 1 ～ 2 年　b. 3 ～ 5 年　c. 6 ～ 10 年　d. 11 ～ 15 年　e. 16 年以上
2．免許資格　a. 幼稚園教諭免許のみ保持　b. 幼稚園教諭免許・保育士資格両保持
3．担任学級　a. 満 3 歳児　b. 3 歳児　c. 4 歳児　d. 5 歳児
4．担当学級園児数（　　）人
5．預かり保育※を　a. 担当している　b. 担当していない
※教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動で、本調査では、定期的に行っている場合を示します。

問 1　新幼稚園教育要領の理解の方法についてお伺いします。以下の各項目について、当てはまる数字に○を付けてください。

		はい	いいえ
1）	新幼稚園教育要領を読んだ	1	0
2）	新幼稚園教育要領解説を読んだ	1	0
3）	園外研修に参加した	1	0
4）	園内で話し合った	1	0

問 2　遊びの質を高める教材や環境の構成についてお伺いします。以下の各項目について、当てはまる数字に○を付けてください。
※教材には、素材や教具だけでなく、動植物、無形物である歌や音楽、ゲームなども含まれます。

		とてもよく行っている	よく行っている	少し行っている	あまり行っていない
1）	一人一人の発達を考慮し、多様な取組を引き出す教材選びをしている	4	3	2	1
2）	教師の願いや指導のねらいを考慮に入れ、教材を精選している	4	3	2	1
3）	試行錯誤できるような教材を選んでいる	4	3	2	1
4）	触覚・聴覚・視覚など様々な感覚への刺激となる教材を使用している	4	3	2	1
5）	探究心や挑戦する意欲を高めるような環境の構成を行っている	4	3	2	1
6）	環境から幼児が発見していることを受け止め、教材として取り入れている	4	3	2	1
7）	環境の偶発性（例えば、雨が降った後の泥を使う）を大事にしている	4	3	2	1
8）	家庭や地域で体験したことや遊びを教材として取り上げている	4	3	2	1

問 3　以下の各項目について、保育を実施するに当たりどの程度意識していますか。当てはまる数字に○を付けてください。

		とてもよく意識している	よく意識している	少し意識している	あまり意識していない
1）	社会に開かれた教育課程	4	3	2	1
2）	環境を通して行う教育	4	3	2	1
3）	幼稚園教育において育みたい資質・能力	4	3	2	1
4）	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	4	3	2	1
5）	カリキュラム・マネジメント	4	3	2	1
6）	全体的な計画	4	3	2	1
7）	主体的・対話的で深い学び	4	3	2	1
8）	幼稚園教育要領の各領域に示されているねらい・内容	4	3	2	1
9）	幼児の発達を踏まえた言語活動	4	3	2	1
10）	遊びの中での学びの理解	4	3	2	1
11）	遊びの質を高める教材の工夫	4	3	2	1
12）	保育の記録や振り返りの工夫	4	3	2	1
13）	幼児理解に基づいた評価	4	3	2	1
14）	特別な配慮を必要とする幼児への指導	4	3	2	1
15）	小学校教育との円滑な接続	4	3	2	1
16）	地域の教育資源の活用	4	3	2	1
17）	幼児の主体性を意識した園生活の流れ	4	3	2	1
18）	預かり保育の充実	4	3	2	1
19）	子育ての支援の充実	4	3	2	1

問４　あなたは、以下の各項目のような指導をどの程度行っていますか。当てはまる数字に〇を付けてください。

		とてもよく行っている	よく行っている	少し行っている	あまり行っていない
1）	基本的な生活習慣や生活に必要な技能を、繰り返し経験する機会をつくっている	4	3	2	1
2）	体を動かして対象に関わり、身体感覚を養う機会をつくっている	4	3	2	1
3）	様々なものや環境に関わり、ものの特徴や違いに気付く機会をつくっている	4	3	2	1
4）	様々なことに気付いたり発見を喜んだりする姿を見逃さず受け止めている	4	3	2	1
5）	日常生活に必要な言葉を理解できるよう支援している	4	3	2	1
6）	多様な動きや表現のための基礎的な技能を獲得する機会をつくっている	4	3	2	1
7）	身近にある数量や文字に興味や関心をもち親しむ体験を大切にしている	4	3	2	1
8）	様々な体験の中で興味をもったことについて、図鑑やインターネットなどを活用し、調べたり分かったりする機会を大切にしている	4	3	2	1
9）	身近なものや環境に関わり、もののしくみを考えたり工夫したり確認したりしている姿を受け止め、考えを深めるような働き掛けをしている	4	3	2	1
10）	他の幼児の考えに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わう機会をつくっている	4	3	2	1
11）	自分の考えを言葉で表現し、他の幼児や教師に伝え合えるように支援している	4	3	2	1
12）	遊びや生活の中で体験したことを振り返り、次への見通しをもてるような話し合いの場をつくっている	4	3	2	1
13）	感じたり考えたりしたことを自分なりに表現する姿を認めている	4	3	2	1
14）	自ら様々な表現を楽しみ、表現する喜びを味わえるようにしている	4	3	2	1
15）	幼児一人一人を大切にし、情緒を安定させ楽しい園生活を展開できるようにしている	4	3	2	1
16）	自分がやってみたいことをやり遂げる体験を通して、自信をもてるようにしている	4	3	2	1
17）	難しいことに挑戦したくなるようなる環境つくりをしている	4	3	2	1
18）	友達と関わる中で、相手の気持ちを受容したり思いやったりする姿を大切にしている	4	3	2	1
19）	環境から、幼児の好奇心や探究心を引き出すことができるような状況を作っている	4	3	2	1
20）	思いや考えを伝え合い、目的を共有したり葛藤体験を重ねたりしながら、協力して遊びや生活をつくり出せるようにしている	4	3	2	1
21）	身近な環境と関わる中で、色・形・音などの美しさや面白さに対する感覚を育てている	4	3	2	1
22）	地域の行事や祭りなど社会とのつながりを意識できるようにしている	4	3	2	1
23）	自然に触れ感動する体験を通して、身近な自然への関心が高まるようにしている	4	3	2	1

問５　教育活動の振り返り（保育記録の記載内容、評価）をどのように行っていますか。以下の各項目について、当てはまる数字に〇を付けてください。

		とてもよく行っている	よく行っている	少し行っている	あまり行っていない
1）	幼児一人一人のよさや可能性などを把握している	4	3	2	1
2）	幼児の姿について気になる点や課題点を把握している	4	3	2	1
3）	教師の指導と幼児の変容を関連付けて振り返り、次の指導に生かしている	4	3	2	1
4）	エピソード、写真や動画などを利用して、多面的に幼児の姿を捉えて保育を見直している	4	3	2	1
5）	他の教師との話し合いや園内研修で自分の幼児理解を見直している	4	3	2	1
6）	幼児の姿について保護者と共有し、保育を見直している	4	3	2	1
7）	月、学期等、長期の視点で幼児の姿を捉えている	4	3	2	1
8）	幼稚園教育において育みたい資質・能力を振り返りの視点にしている	4	3	2	1
9）	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を振り返りの視点にしている	4	3	2	1
10）	幼児の発達の状況を次の担任や小学校等に引き継ぐよう工夫している	4	3	2	1

問６　新幼稚園教育要領告示以降、ご自分の保育内容・方法等に関する意識が変わったと感じたことを簡潔にお書きください。特にない場合は、空欄にせず「なし」とお書きください。

（　　）

問７　新幼稚園教育要領に基づき保育をすることによって、幼児の様子が変わったと感じたことを簡潔にお書きください。特にない場合は、空欄にせず「なし」とお書きください。

（　　）

問 8-1　新幼稚園教育要領に基づいて保育を展開する上でどの程度困難さを感じていますか。当てはまる数字に〇を付けてください。

1）困難をあまり感じていない　　2）困難を少し感じている
3）困難を感じている　　4）困難をとても感じている

問 8-2　上記の質問で、2)、3)、4）のいずれかに回答された方にお聞きします。困難と感じていることを１つお答えください。

（例 .「〇〇〇の具体的イメージがつかみにくい」「〇〇の具体的な方法が知りたい」など）

（　　）

御協力ありがとうございました。

公益社団法人全国幼児教育研究協会
e-mail: admin@zenyoken.org

付記：
令和元年度 文部科学省委託「新幼稚園教育要領の実施状況の把握と理解推進の方策」
○調査研究実行委員会の組織　代表　岡上　直子
○調査研究実行委員会　（五十音順）

実行委員長	岡上　直子	元十文字学園女子大学 教授
委　　員	足立　祐子	台東区立竹町幼稚園長
委　　員	岩城　眞佐子	東京都教職員研修センター 研究研修支援専門員
委　　員	内海　緒香	お茶の水女子大学 講師
委　　員	桶田　ゆかり	十文字学園女子大学 教授
委　　員	神谷　美和子	江東区立もみじ幼稚園長
委　　員	黒澤　聡子	國學院大學 教職顧問
委　　員	小山　容子	創価大学 講師
委　　員	中井　清津子	相愛大学 教授
委　　員	中村　和穂	淑徳大学 講師
委　　員	中村　香津美	竹早教員保育士養成所 専任教員
委　　員	難波　和美	（公社）全国幼児教育研究協会 事務局長
委　　員	林　友子	帝京科学大学 教授
委　　員	東川　則子	聖徳短期大学 教授
委　　員	福井 直美	明治学院大学　特命教授
委　　員	宮里　暁美	お茶の水女子大学 教授
委　　員	宮本　友弘	東北大学 准教授
委　　員	山﨑　佳世	由田学園千葉幼稚園長
委　　員	若槻　容子	中野区立ひがしなかの幼稚園長

○ワーキンググループ（本会調査研究部）

統　　括	岡上　直子	前掲
部　　長	黒澤　聡子	前掲
副　部　長	岩城　眞佐子	前掲
副　部　長	林　友子	前掲
部　　員	足立　祐子	前掲
部　　員	神谷　美和子	前掲
部　　員	小山　容子	前掲
部　　員	中村　和穂	前景
部　　員	中村　香津美	前掲
部　　員	東川　則子	前掲
部　　員	宮里　暁美	前掲
部　　員	山﨑　佳世	前掲
部　　員	若槻　容子	前掲

○訪問調査協力園
滝川幼稚園
由田学園千葉幼稚園
台東区立竹町幼稚園
大和郷幼稚園
港北幼稚園
名古屋市立第一幼稚園
大阪市立靭稚園
鳴門教育大学附属幼稚園
藤影幼稚園

○訪問調査協力員
黒瀬　優子　元日本女子大学附属豊明幼稚園長
瀬田　雅江　元練馬区立光が丘さくら幼稚園長